

第2部 全文連設立30周年記念特別講演

「近世建築を楽しむ～近世社寺建築の魅力～」

講師 元文化庁文化戦略官 熊本 達哉氏

全文連設立30周年おめでとうございます。30年前のことを思い返しますと、文化庁で近世建築緊急調査、近世の社寺建築を見直そうというプロジェクトが進んでいまして、丁度その頃に全文連が立ち上げられた、ということで、それが今日の講演につながってきたのだらうと思います。

文化庁にいた間に集めた資料や皆さんからご好意でいただいた資料を見返しているとすごく楽しくてしょうがない、日本建築って豊かなんだなあ、ということを実感しております。そこで今回はそういう実感のもと、近世の建築についてお話させていただきます。

はじめにというところで、近世の文化全般についてお話しし、近世とは、近世の時代感、そして古代における建築デザインについてお話ししたいと思います。

1 近世とは

近世の建造物建立の時代区分

- & 桃山：織豊政権のもとの桃山文化
- & 江戸前期：桃山を受け継ぐ寛永文化
- & 江戸中期：元禄文化、享保の改革で終焉
- & 江戸後期：寛政の改革を挟み、宝暦明和と化政期
- & 江戸末期：天保の改革から時代の終焉

近世の文化にはどんなものがあつたか。近世前期は桃山文化から寛永文化、中央政権、信長、秀吉、そして家康へと続く結構安定した時代において、宗達、探幽が出てきます。江戸中期に入りますと、幕府とか政権の関与から離れて町衆、街の人々が参加するようになってきます。そういった中で出てきたのが、光琳、乾山。さらに若冲というアウトローの作家も出てきて江戸文化が花咲きます。そして幕末に向かいます。文化・文政期の渡辺華山などは日本絵画なんですけど、西洋絵画の影響を受けています。建築では、桃山文化では大徳寺唐門、本願寺飛雲閣等々、寛永文化では日光がありますし、ともかくこの時代には、立派な建



物が建てられています。元禄文化では、東大寺、善光寺があります。しかしそれ以後、中期から後期には建造物は文化に関係するものは造ってなかったのか、というような時代です。

通史で取り上げる近世近代建築

- & 桃山文化：姫路城、備中松山城、犬山城、松本城、大徳寺唐門、本願寺飛雲閣、都久夫須麻神社本殿、本願寺書院、醍醐寺三宝院表書院、二条城二の丸御殿、妙喜庵待庵（茶堂）
- & 寛永文化：桂離宮（数寄屋造）、清水寺本堂、日光陽明門、延暦寺根本中堂、崇福寺大雄宝殿、萬福寺大雄宝殿
- & 元禄文化：東大寺金堂（大仏殿）、善光寺本堂
- & 化政文化：
- & 明治の藝術：ニコライ堂、日本銀行本屋、旧岩崎邸、旧日本郵船小樽支店、慶應義塾図書館、赤坂離宮、占勝閣
- & 市民文化の形成：旧帝国ホテル、東京駅

2 近世以前

最初に古代。古代というのは、飛鳥、奈良、平安時代ですが、この時代の建築では、奈良時代の薬師寺東塔を挙げさせていただきます。西塔という、現代に復元させた塔があるのですが、先頃、建造物の研修会の折に、どちらが好きかと尋ねると、「東塔が好き」と言う人が多いですね。これは困ったもんだなあと思って、西塔というのは、東塔を復元したもので、東塔で水煙が復元できなかったもので、西塔で復元したのです。

次に挙げますのは、平安時代です。平安時代は1052年から末法の時代に入ってきます。それに自分たちはどうやって浄土に行くんだということに悩んだ時代です。この時代に建築デザインとしていろんなものが出現します。基本的な浄土を求める建築というのは、一間祈念、つまり中央に方一間、周りに四方に庇が付くというのが基本になります。正面三間、側面三間のお堂で、それが本尊を阿弥陀尊とする常行堂として使われている。それが阿弥陀堂として流行り出し、奥州平泉では、金色堂が造られる。金色堂は見ての通り素晴らしい装飾で、藤原氏四代の極楽往生への願いから造られた、豪華な阿弥陀堂でございます。

〔平安後期〕1124



極楽浄土 〔中尊寺金色堂〕

更に宇治平等院の鳳凰堂、これについても、肝心な仏教というのは、この部分（中央部分）のみが阿弥陀様をお祀りして宗教的な中心部分ですね。それ以外の翼廊とか尾廊というのはあくまで形を調える、つまり鳳凰の形にしたいということで造り上げたものです。鳳凰の形を極楽浄土の形だという、絵画的なものを現実世界に現したものです。

3 近世の寺社建築の魅力

出雲の出雲大社（いずものおおやしろ）は江戸時代には慶長、寛文、延享、文化に造営が行われ、明治、昭和にも行われています。慶長14年（1609）の造営までは、神仏習合があり、その影響が著しく残っています。

それが、寛文7年（1667）の造営では、唯一神道（吉田神道）に基づく造営遷宮を行うということになりまして、本願（勧進僧）を排除し、鰐淵寺という神宮寺と断絶します。そして社頭景観から本殿までを完全に神道的景観で造ろうという発想で造営を行います。つまり、中世の神仏習合的な姿から、神道本来の姿に戻ろうという変更が起こります。

慶長度造営

& 慶長14年（1609）豊臣秀頼による造営
 & 尼子氏以来の造営形態の継承
 & 神仏習合の影響が著しい
 & 正殿として造営（江戸期には仮殿式といわれる）
 天正度と同じ五間四方（32尺5寸）
 近世的様式の色濃い本殿
 : 礎石建に変更、階隠の付加、剥柱や長押、出組の斗拱、二軒の仕様、破風に龍二匹の彫刻、内外の塗装、内壁の極彩色絵、鍔金物などの装飾等々の新しい要素

寛文度造営

& 寛文7年棟上げ、遷宮
 & 唯一神道（吉田神道）に基づく造営遷宮
 & 本願（勧進僧）の排除、神宮寺（鰐淵寺）と断絶
 & 神道的社頭景観の創出（三重塔、鐘楼など仏教的施設の排除）
 & 八足門や拝殿、楼門などに彩色塗装や彫物など装飾を残す
 & 神道的（復古的）と考える本殿の創造
 & 幕府普請による境内景観一新

そして延享元年（1744）の造営では、本殿はすでに神道本来のものになっていますが、それ以外の建物にまだ若干仏教的な雰囲気が残っているというので、徹底的にそれをなくします。

延享度造営

& 最後の造替遷宮
 & 延享元年 上棟遷宮
 & 日本勸化の始まり（上級神職による全国勸化）
 & 「白削建直し」（解体移築）など一部建物の再用
 & 部材の再用や転用
 & 仮殿の省略（仮遷宮、下遷宮の省略）

文化度造営

& 修理遷宮の始まり
 & 文化6年 遷宮
 & 造替遷宮を目指すも至らず（日本勸化、幕府から3000両）
 & 修理遷宮が可能となった理由
 礎石建の結果、健全な軸部材
 延享度において本殿以外は完全な造替に至らず（明治度遷宮も同様の経緯）

そして文化6年（1809）では、それまでは完全な建替が行われていたのですが、この時には修理遷宮になります。なぜ修理遷宮ができるように

なったかという、秀頼公の慶長造営の時から礎石建になりました。それまでは神社建築の本来のものは掘っ立て柱建だったのですが、礎石建になって、柱は地中に埋まっていますので、修理遷宮が可能になったわけです。

4 建造物装飾

続いて、装飾のお話をします。なぜ「装飾建築」とは言わないのか。神社仏閣の中で、寺院建築は、荘厳という仏様を飾るといことが行われていまして、宇治平等院鳳凰堂にしても金色堂にしても、時代々々の最先端、最高度の彫刻、彩色、漆、螺鈿細工、そういったものが用いられた。それに対して、神社建築というのは、殆ど装飾が無い。内陣に至っては、内陣というのは御神体を御安置する倉庫的なものですから、ほとんど色目を使っていない。神社建築というのは、基本的には白木を旨としている。京都の宇治上神社が現存する一番古い神社建築と言われていますけれども、白木神社です。そういった面から言うと、装飾が賑やかになるのは近世になってからだということです。

彩色というのがやっかいなのは、いつ塗ったかという記録が案外無いということです。奈良の宇太水分神社本殿ですけれど、修理の時に復してますけど、当初の彩色は、鎌倉後期かもしれませんけれどもとにかく一番古い彩色です。



続いて室町後期の兵庫県宍粟市の御形神社なんですけれども、このへんになってきても手挟みは手挟みで納めてますし、墓股は墓股で、形はほとんど変わらずに祭殿に彫刻を入れる。あくまで前提にしたものは、外観を装飾で飾るといことです。

それが、桃山に入りますと、かなりいろんなものが出てくる。それはいつかという、信長、秀吉の頃じゃないかと思われます。残念なことに信



長の安土城も秀吉の大坂城、伏見城、聚楽第、そういったものが全て失われているので、この天才二人が何をやったかということがほとんど分からない。三宝院の唐門ですけれど、漆塗りの大胆な意匠、家紋を金箔で貼ってとか、こういったすごいデザインがたぶん大坂城や伏見城でかなり頻繁に使われていたのじゃないかと思われます。そして日光東照宮が出てきます。いっぺんに彫刻も増えますし、意匠も増えます。装飾的要素をやり過ぎるぐらいやった。漆面にはすべてのものを放り込む。本殿の前の唐門は「四方唐破風造」という側面にも唐破風がついたものです。



すごい唐門ですね。よくこんな形を思いついたものです。中世から寛永期にいっぺんに最高潮を迎えます。これ以上装飾しようとかはできないという装飾社殿の国宝級に至った。それに対して本殿廻を見ても。御本殿はあくまで御祭神を入れる空間ということで、白木造りで、天井だけは格天井とか組天井になっているんですけれども、あとは深くて広い空間になっています。そしてけっこう節の多い材料を使っているんです。私たちの考えでは、神様のおられる部屋には最高の柱

を使って、最高の装飾なりをしているのではないかということですが、逆で、ここは宮司様以外は入ることがない空間であるということで、最高の仕事はしていない。

5 日光後の展開 庶民の関わる社殿建築に波及

装飾が頂点に達したのが日光だとするなら、日光後はどうなったのか。装飾をそれ以上増やすというような神社は見当たらない。地域性とか地方性といったものがよく分かるようになります。

江戸後期の熱田神社という神社（長野県伊那市）の本殿を建てるのに300両要った。その300両をどう工面したかということ、村人が寄進してやった。そうすると江戸時代の農民というのは、お金がなくて、喰っていくのがやっとなというイメージとは全然違うんですね。自分のウチと自分たちの土地のお宮さんが大切、そこまでが農民達の生活である、ということだったんでしょうか。長野において、白木の彫刻の社が建てられているのです。

鳥取に於いても同様の神社建築があります（註：聖神社・鳥取市）。おもしろいのは、禅宗様で海老虹梁というのが入ってきまして、虹梁というのは、向拝柱と本屋の柱の間水平材で繋ぐものですが、そこに海老の彫り物を作る。鳥取県では、他に神崎神社とか安楽寺にもこういう海老虹梁がみられます。また、聖神社では、側背面の下から見えるところでは扇垂木を使って、正面では平行垂木を使っています。折衷に近いようなやり方です。

〔江戸後期〕1789-1801



〔聖神社本殿（鳥取市）〕

6 様式のリヴァイバル

この時代、様式のリヴァイバルということで、一つは「雲斗栱」。法隆寺の金堂等に見られる雲形の斗栱があったのですが、そのデザインを持っ

てきて江戸時代にはめ込んだものです。

〔江戸中期〕1736



飛鳥リヴァイバル：江戸の雲斗栱 〔一心院本堂〕

それからもう一つ「鋳葺（しころぶぎ）」。これも法隆寺の様式なんですけど、これは、デザインというよりも法規制からの関係です。柱が三間を超える建物を建ててはダメだという法規制があって、その関係で、この鋳葺の家の部分は三間で納めます。周りは主屋ではなくて庇ですという説明をして規制を逃れるために鋳葺にしています。

〔江戸中期〕1700



鋳葺 〔地藏院本堂（三重県亀山市）〕

（掲載内容は講演の要旨です。この後、「見え掛かりと見え隠れ」「建築における奇想、奇抜」「村落の神仏 村堂と産土神（村鎮守）、菩提寺」「町並景観の発見」「おわりに」と続きました）



設立30周年記念特別講演会 会場風景